

2014年5月31日(土)～6月1日(日)

第15回日本認知症ケア学会大会 東京国際フォーラム

開設6年経過した通所リハの認知症予防の実際(第6報)

前頭葉活性化を中心に

植田浩次¹⁾, 大谷章仁¹⁾, 松本祥平¹⁾, 井畑浩敏¹⁾, 西幸宏¹⁾, 宮島千鳥¹⁾, 谷正人¹⁾, 石垣恵一¹⁾, 藤田園子¹⁾, 村田智恵²⁾

1) 医療法人聖志会 渡辺病院, 2) ケアプランセンターわたなべ

【はじめに】

当院の通所リハビリテーションにおいて、平成20年7月から利用者に対して前頭葉賦活化認知リハビリテーションを開始した。

今回、開始後6年経過しており、利用者とは非利用者との認知機能の変化を集積・分析し報告したい。

【対象】

通所リハビリテーションには60名の軽度の認知障害・認知症の方が週1回ないし2回参加している。そのうち46～61ヶ月(平均52.3月間)以上継続している利用者6名(男性3名:女性3名)平均年齢84.3(76～89歳)HDS-R平均 18.1 ± 6.7 を利用者群として、非利用者を対照群39～53ヶ月(平均46.7月間)以上外来継続している6名(女性6名)平均年齢81.0(72～88歳)HDS-R平均 14.6 ± 3.8 とした。

【方法】

1回あたり3時間30分の作業療法士による認知リハビリテーション(休憩時間を含む)を行った。内容:①指体操 ②ひらがな並び替え ③条件しりとり等利用者とは非利用者のHDS-Rの点数変化を算出し、二標本t検定(ウェルチ検定)を行った。

【倫理的配慮】

利用者には研究の主旨と個人が特定されないよう配慮を行う旨を口頭に伝え承諾を得た。

【結果】

現在(平成25年12月10日)のHDS-Rの低下点数は、利用者群において 2.7 ± 5.9 点、非利用者群において 3.8 ± 6.2 であり両者の間には有意な差が見られなかった。(p=0.74)

【考察】

一昨年報告では、利用者とは非利用者との間に有意差を認めたが、今回は両者の間に統計学的に有意な差が見られず、平均点において1点の差のみにとどまった。前頭葉活性化訓練が有効でないとは言いきれないが、他の要因も検討して、事例を積み重ねる必要があると思われる。